『じゅげむの夏』を読んで

梶小学校　三年　垣渕　大和

夏休みなので夏のテーマの本が読みたかったから題名に「夏」と書いてあるこの本をえらびました。

この本にとうじょうする人物は四人です。その中の一人のかっちゃんは、きんジストロフィーと言うびょうきです。きんジストロフィーとは、歩けなくなったりするびょうきです。このかっちゃんが夏休みにやりたいことを、せんげんします。ほかの三人（ぼく、シューちゃん、やまちゃん）はかっちゃんのねがいをかなえるためにいろいろなけいかくを立てぼうけんをするお話です。たとえば川にとびこんだり、おばけトチノキというとても大きな木を見に行ったりして、かっちゃんのねがいをかなえるお話です。

かっちゃんのもっているきんジストロフィーというびょうきを、ぼくははじめてしりました。ぼくは、けんこうで、いろいろな事ができるけど、かっちゃんの様なびょうきの人がいることがわかって、そのびょうきにかかった人は、とてもたいへんなくろうをしているのだろうな、と思いました。もし自分も同じびょうきにかかったとしたら、いまできていることができなくなり、かなしい思いをすると思います。

ほかの三人は、びょうきのかっちゃんのために、いろいろな事をけいかくしてすごいと思いました。なぜなら、もしぼくなら、びょうきをもっている人のためにぼうけんのけいかくをたてることは、とてもむずかしいと思うからです。でも、この三人がかっちゃんのためにぼうけんの計画ができたのは、三人ともかっちゃんのことが大すきで、かっちゃんに夏休みを楽しんでもらいたいから、ちょうせんできたのだと思います。また、ぼくなら一人では山にのぼったり、川にとびこんだりすることはできないと思います。四人がかっちゃんのやりたいことをできたのは、一人ではなく、四人いたからだと思います。四人でやればどんなこともおもしろくなってしまうからだと思います。だから、ちょっとこわいと思う所も四人だったらおもしろくなって行けてしまうのだと思います。

ぼくは、この本を読んで子どもたち四人だけで、ぼうけんがしてみたいと思いました。だけど、ぼくならちょっと遠い所へ行こうとしてもダメだと言われるし、クマがこわいので山に行くこともできません。でも、何人かいたら一人ではできないことができるようになるかもしれないし、一人では発見できないこともできるようになるかもしれません。だから、学校の近くでも友だちといっしょならおもしろいぼうけんができそうかもしれないと思いました。

世界の平和を消さないために

佐太小学校　四年　松本　陽紗乃

わたしが、学校の図書室でどの本を読もうかなとまよっていた時に、この本を見つけました。この本を見つけた時これは国語の教科書にのっていた本だとびっくりしました。とてもうれしかったので、先生や友達に知らせました。そして、どんなないようかわくわくしながらこの本を読み始めました。

この題名を読んだ時わたしは、だれかしらの人にきらいな勉強を言えばその勉強が明日には、消えているという話だと思っていました。わたしが思っていた話とは少しちがいましたが勉強が消えるというのは、いっしょでした。

この本はあるすみがついて見えなくなった勉強が消えてしまうお話です。そのすみとは、お寺で病気をなおすために使われていたすみです。そのすみで書かれたものは、なんでも消えてしまうというまほうのすみです。そのすみを男の子がぐうぜん見つけて、学校に持ってきてしまいました。そこからいろいろな勉強が消えていくという物語が始まります。

この本を読んでいて「わたしだったら、理科が消えてほしいな。」と思いました。なぜなら、わたしは虫があまりすきではないからです。でも理科の中でも、実けんはすきです。この話の中では、一週間ごとに時間わりが配られていたので、わたしは「虫の勉強の時だけ消えたらいいな。」と思いました。

わたしがこの本の中で一番心にのこったのは、ふしぎな力を持っていたそうりょが病気やわざわいごとにこまっている人たちをふしぎなすみで助けた、という場面です。わたしは、自分のために「理科を消したい。」と思っていたけど、この本のそうりょは自分のためでなく、みんなのために使っていました。そのそうりょは、自分よりも周りの人達を助けるとてもやさしい人なのだと思いました。もし今もそのすみがあるのだとするなら、おばあちゃんの病気やこしのいたみを消してあげたいなと思いました。そして、おばあちゃんと思いっきりスイーツを食べたり、いっしょに犬のさんぽに行ったりしたいです。

そして、世界の色々な場所でおこる争いもすみの力で消せたらいいなと思います。オリンピックでは、たくさんの国の人達が試合の後にえ顔であくしゅをしているのを見て、ちがう国でもみんなが仲良くできたらいいなと思いました。そして、いつかすみの力を使わなくても、世界中の争いがなくなるように、まずはわたしも友達や家族とけんかをしないようにしようと思いました。そして、この気もちが世界の人々にも広がっていけばいいなと思います。